
影 lobmyssu oi cilama

青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影 lobmyssu oicilama

【Nコード】

N9462X

【作者名】

青

【あらすじ】

私たちの住む世界とは違う所がある。

普通あるはずのものが、そこには無い。

そんな世界で暮らす少女の視点で描いていく、

ほのぼのしていて、

不思議で、

ちよっぴりホラーな物語。

プロローグ

灰色の石畳の上、狭い路地裏をコツコツと靴を鳴らして歩く、長い黒髪の少女。

とつくに日は落ち、辺りは風呂敷を広げたような闇が包んでいる。時々道を照らす街頭には羽虫が集り、足元にもその死骸がいくらか転がっていた。私は何の躊躇もせず上を跨いで帰路を急ぐ。

「……………っ！」

両手で抱えた紙袋から林檎が一つ零れ落ち地面で緩やかなカーブを描く。バランスをとりつつ片腕を伸ばし拾おうとするが、あと数センチのところまで気が抜けた。更なる被害を招くのを防ぐため、左足を軸に奇妙なステップを刻み何とか事態を回避。

周りに目を凝らす。

良かった、今の恥ずかしい姿は誰にも見られていないらしい。こんな夜遅くにそうそう出掛ける人もいないかと一人で納得し、再度林檎に手を伸ばした。

視界の隅で影がちらついたような気もしたが、あれは特に問題は無い。私達とは住む世界が違うのだから。

袋を持ち直し、今度こそミスを犯さないようゆっくりと……………。

ゆめを売る姉弟

足を止めたのは、こぞんまりとした、レンガ造りの店。

『ゆめうり』

少し歪んだ楕円の木製看板に金細工でそう文字が入れてある。木の葉をモチーフにした細かな装飾は、その道十五年のベテランに頼んで作ってもらったものだ。

扉の両脇には小窓、そこから覗く銀食器が部屋の明かりを反射させキラキラと輝く。

段差に足を掛けプルノブを引くと、まず初めに高く澄んだベルの音が出迎えてくれた。

「あ、姉さんおかえり」

少しして店の奥から顔を出したのは、二つ下の弟であるノア。私の恰好を見るなり、カウンターに肘を乗せて溜め息を吐いた。

「姉さん……」

？ 何かおかしな点があるのだろうか。

ひとまず買った物をカウンターへ置き、自分の姿を確認してみる。アイロンもしたからシワはほとんど無いし、綻びも無い。不満に思える要素は見つからないのだが。

「もう十九歳なんだから、少しくらい色気を押し出しても良いんじゃないかな？ 年頃なんだから気を使おうよ」

渋い表情で言うノアは確かに、最近変わってきた。流行がどうのと楽しそうに話していたが、いつの間にか増えた服やズボンは一着や二着ではない。小遣いは足りているのだろうか、などといらぬ心配をしてみる。

因みに今着ているのはジーンズと、白地のシャツに黒っぽいチエツクの上着だった。弟はスラっとした長身だから、よく似合っている……と思う。

対する私は無地の、紺色の外套。……派手さが足りないということ？

「あーやっぱいいや。それよりほら、店閉めて晩御飯にしよ」

考え込む私を見兼ねてか、背を向け別の事を提案してくるノア。私だってがんばれば……という科白は「はいはい」と適当に手を振り流された。これでもお気に入りの服だから何気にシヨックなのだが。

「大丈夫。元々が綺麗だから、どんなの着ても見栄えがするよ」

奥に消えるノアの言葉に、あしらわれていると分かっているても、つい嬉しくなってしまう現金な私であった。

アンティーク取扱い店『ゆめうり』店主、カタリナ・アルベス。今年で二十。普段は周りからカティと略称で呼ばれている。若くして親元を離れ、こっそりと骨董品店を営む風変わりな姉弟なんて評されてはいるが、実際好きなのだからしょうがない。親にもちゃんと説明して許可を得てきた。ただ、弟は私と違い。

「姉さんだけだと不安で不安で……」

失礼な事を言いながらついてきた。そんなに頼りなく見えるだろうか。

まあしかし、内心一人では淋しいと思っていたところだったし、弟がいて助かったことはたくさんある。主に力仕事はノアが担当してくれているから、負担はかなり減っているはずだ。感謝しなければ。

『ゆめうり』というネーミングも二人で考えたものだ。

そもそも私が骨董品を手にしたのはまだ小さい頃、父が旅行先で入手したキャンディボウルが初めてだ。ガラスで出来たやや小さめのそれは、綺麗というよりも可愛いという表現の方がしっくりくる一品だった。特に花型の擦り模様は心を惹かれた。

母の反応がいまいちで、それならばということでは私が貰うことになったのだ。早速キャンディーを棚から持ってきて、その中に流し込む。色とりどりの梱包紙で包まれた粒が器を満たし、一層見たい目が華やかになった。

「あの子ずっと見てるわね」

「はは、この年で芸術に興味があるとは。将来有望じゃないか」

いつまでも見惚れている私に微笑を浮かべる両親。この素敵なプレゼントは引越した今でも店内に飾ってある。あれからだ、アンティーク商品に手を出し始めたのは。

どこがおもしろいのと聞かれたことがある。それにはこう答えた。長い間大切にされ、様々な人の手を経て、ひとつひとつが持つ物語を想像するのが私の楽しみ方。それもここでは終わらず、ものによつては何百年も、私よりもずっと長く生きていく。手に取った人の意思を受け継いで。

夢が詰まっている。

簡潔に述べるとそうなのだろう。店の名前の由来もここからきている。

実を言うと先程の質問は店名を決める際に弟が質問してきたもので、答えを聞いた弟は頭を掻きながら

「なら夢を売るってことで 夢売り……なんてどう？」

でかした！ とばかりに抱きつかうとしたら逃げられた。

夢を売るお店、夢売り。

こうして路地の一角に『ゆめうり』という私にとって特別な場所が生まれた。

それから半年が過ぎた。ここでの生活にも完全に馴染み、お得意様も出来た。全てが順調に進んでいる。思えば、こんな風にゆつたりと日々を送れる仕事は、のんびり屋の自分に合っている。まさに私のための仕事……とは言い過ぎかもしれないが。とにかく、現状に満足していると言っておこう。

料理をしつつ過去に思いを馳せていると、お腹を空かせたノアの催促が飛んでくる。

「待つて、もうすぐだから！」

バターで炒めた玉ねぎとジャガイモ、キャベツを加えて軽く塩胡椒し更にソテーする。灰汁を掬ってミキサーにかければ、後は味を調べて完成だ。髪の毛が鍋の中に入らないように注意しながら、お玉で掬い、息を吹きかけ冷まし啜ってみる。うん、おいしい。

湯気を立てるポタージュを真っ白な皿によそい、隣にパンを2つ添えてリビングへ。

我が家のリビングは入り口のすぐ近く、というか、店舗と役割を兼ねている。立地の条件で家の部屋割りはリビング・台所・寝室…合わせて三つ。これでも、この辺ではかなり広い方だし、私達にとっては十分すぎるほどだ。

部屋の中心で、アンティーク品に囲まれてノアが椅子に腰かけ待っていた。頭の後ろで組んでいた手を解き、持ってきた晩御飯を期待を込めた目でじっと見つめる。そんな弟にちよつと笑いながら、飴色をした木肌のテーブルの上に食材を並べていく。

スプーンまで並べ終わり、ノアとは反対側の椅子に腰を下ろした。ギシシと背もたれが軋む音が服越しに伝わってくる。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

手を合わせ、目を閉じる。昔から母に「食べるとは命を奪うことでもある」と、さんざん聞かされた。それがあってか、どんなに空腹でも最低限の礼儀として欠かさないようにしている。静かに瞼を開けた。

「あれ？ …… ノア、先に食べてていいわよ」

既に口を付けていたノアが不思議そうに私の動きを目で追う。向かった先は玄関。

微かに物音が聞こえたのだ。扉を軽くノックする音。

こんな時間に？ 夜更けには悪魔が攫いにやってくる、という俚言があるようにこの家にも来てしまったのだろうか。

「はい、どちら様……ま」

もうすぐ雪の季節だから吹き抜ける風が冷たい。どこからか舞

つてきた枯葉が、部屋から漏れる四角い光を横切っていった。

「姉さんどうしたの？」

スプーンを咥えたまま歩み寄ろうとするノアを「危ないよ」とやんわり咎め、一応周囲を確認してみるがやはりそこには誰もいない。

……ああ、そうか。

「ただの影だったわ」

そう言つと納得したように自分の席へ戻っていった。たまにあるのだ。彼らは人々と直接関わることはないが、時々こうして悪戯ともつかないことをしていく。どうしてそんなことをしようと思えるだろう。形が人間に似ているだけに、意思の疎通など、がんばれば出来そうなものだが……。元々は人間の持ち物だったと考える学者もいるくらいだ。でも、私には今の状態が普通だから到底そうは思えない。

私たちにも影があったなんて。

「影かあー……何で物や動物にはあるのに人間にはないんだろうね？」

ノアが行儀悪くテーブルに手をつき、椅子の後ろ脚だけで前後に往復しながらポツリと呟いた。危ないと、また注意しようかとも思ったが、あえて口には出さないことにした。経験も必要だろう。扉

を閉じる前に、正面に掛かったプレートが『OPEN』のままだった事に気づき、裏返して『CLOSED』にしておく。戸締りをしつかりチェックして食事を再開。

それで、影か。専門の研究者にさえ影についてのメカニズムを解き明かせていない。それを私が考えたところで分かるはずも無いだろう。

「ほらほら、夜遅いんだし……早く食べて早く寝よ」

我ながら苦しい言い訳だと思ったが、夜遅いのは本当だ。ノアもそれ以上話を広げることなく大人しく従ってくれた。明日は朝一番に表でマーケットが開かれるのだ。良いものはすぐに売れてしまうから寝坊は避けたい。

どんな品物を買おうかと想像を膨らませながら銀のポットに手を伸ばし、白い陶器のティーカップに注ぐ。リンデンティーという薄黄色の紅茶だ。リラックス効果や安眠効果が高く、ある国では落ち着きのない子供に飲ませるらしい。別名でベビーティーと呼ばれる所以もそこにある。

「うちそうさまー」

ひと足早くノアが食べ終わり、自分の食器を重ねて台所へ向かった。洗い終わるのを見計らい、私も後に続く。広さがあまり無いので、ひとりずつしか入れない。「先に寝るね」と欠伸をするノアを見送り、スポンジを握って蛇口を捻る。キンキンに冷えた水に身を強張らせた。少しだけ目が覚めたが、手に付いた水滴を払う頃には眠気が再び限界に達していた。

消灯後、寝室まで足音を立てないように歩く。薄青い明かりが、廊下をぼんやりと照らしている。見慣れた場所でも、昼と夜で雰囲気が大きく違ってくるから不思議だ。

いつの間にか出ていた月を窓から覗く。
空をすっぽりと覆っていた雲も今では散り散りに、その周りを避けるかのようにゆっくりと漂う姿はどこか幻想的で、私はしばらく夢心地で見上げていた。

ゆめを売る姉弟（後書き）

どうも、青です。

いえ、まあ、ここまでだと「なんのこっちゃ」「って感じですが（笑）
じつは一応、タイトルにヒントとか隠してあったりなかったり……
（ボソッ）

この話の更新はだいたい一ヶ月毎にやろうと思っています。
早く書ければすぐ載せますが。

意見、感想、アドバイス等がありましたら是非お願いしますm（
ー）m
当初は『書き上げてから載せる』ということでしたが、色々あつ
て（間に合わなっ……！）無くなりました。なのでこの作品はのん
びりとやっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9462x/>

影 lobmyssu oi cilama

2011年11月16日15時28分発行